

金沢大学創基百五十年記念事業関連企画

金大 事始

加賀藩種痘所から
学都金沢へ

平成二十三年年度

金沢大学資料館特別展



金沢大学の沿革

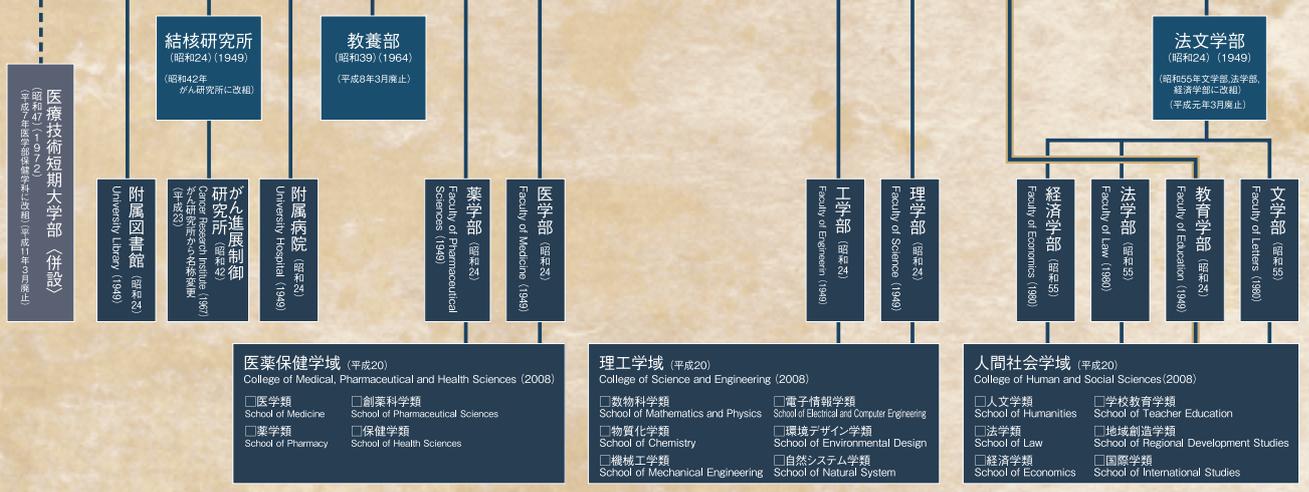
History of KU

1862 加賀藩彦三種痘所開設
(金沢大学の創基)

1949 金沢大学 発足

2004 国立大学法人 金沢大学発足

2012 金沢大学創基150年



金沢大学歴代学長一覧 Presidents of Kanazawa University

初代 First	戸田 正三 TODA, Shozo	1849.9.22~1961.9.21
第2代 Second	石橋 雅義 ISHIBASHI, Masayoshi	1961.9.22~1967.9.21
第3代 Third	中川 善之助 NAKAGAWA, Zennosuke	1967.9.22~1973.9.21
第4代 Fourth	豊田 文一 TOYOTA, Bun-ichi	1973.9.22~1979.9.21
第5代 Fifth	金子 曾政 KANEKO, Katsumasa	1979.9.22~1985.9.21
第6代 Sixth	本陣 良平 HONJIN, Ryohpei	1985.9.22~1989.9.21
第7代 Seventh	青野 茂行 AONO, Shigeyuki	1989.9.22~1993.9.21
第8代 Eighth	岡田 晃 OKADA, Akira	1993.9.22~1999.9.21
第9代 Ninth	林 勇二郎 HAYASHI, Yujiro	1999.9.22~2008.3.31
第10代 Tenth	中村 信一 NAKAMURA, Shin-ichi	2008.4.1~



※昭和24(1949)年以前の前身校沿革は主要なものを示した。
平成23(2011)年4月現在。

ごあいさつ

来たる2012年は、本金沢大学の濫觴らんしょうとなりました加賀藩彦三種痘所か がはんひこ さんしゅとうじょの開設から150年目に当たります。本学ではこれを「創基150年」の記念の年と位置付け、それに向けてさまざまな記念事業を展開しています。本資料館でも、記念事業がスタートした2009年より秋の特別展をその関連行事と位置づけ、本学の歴史を3年がかりで遡って行くというシリーズ企画を立てました。2009年の第1弾は「彰往察来しょうおうさつらい」と題して1949年からの城内キャンパスの時代を採り上げ、ついで2010年の第2弾では「前身校の先達たち」と題して1887年以降の前身校の歴史を第四高等学校と金沢医科大学出身の著名人10名に代表させて展示しました。そして本シリーズの最後である今年は、創基の年である1862年から前身校開校までの歴史を追うこととし、「金大事始きんだいことしはじめ～加賀藩種痘所から学都金沢へ～」と題して、前身校のさらなる源流である幕末明治初期の諸学校とそこでおこなわれた医学教育・科学教育に焦点を当てた特別展を企画しました。

すでにお気づきのように、本特別展のタイトル「金大事始」は、『解体新書かいたいしんしょ』の翻訳事情を中心に蘭学草創期のことを綴った杉田玄白すぎた げんぱくの著書『蘭学事始』に基づくものです。そこには、本学が西洋医学の教育・診療・研究から始まったことだけでなく、創基である加賀藩種痘所の開設が金沢における西洋医学・科学の展開において非常に重要な位置を占めたとの意、そしてそれに関わった人々には杉田らが『ターヘルアナムトミア』の翻訳を始めた時と同じような熱気が存在していたとの意が込められています。

私たちは、この特別展を通して、学内外に本学の伝統を知ってもらうだけでなく、幕末明治初期における金沢の学問レベル・教育レベルの高さとそれを支えた人々の努力と情熱を、少しでもリアルに伝えていきたいと思っています。

金沢大学資料館長 古畑 徹

目次

ごあいさつ

I. 金沢大学の源流	P 2
コラム1 加賀藩彦三種痘所の開設と平成の跡地推定	山本 博 P 4
II. 金沢大学創基のころ ～加賀藩種痘所の開設とその背景～	P 5
種痘関連年表	P 7
コラム2 幕末の加賀藩	宮下和幸 P 7
III. 幕末・明治初期の金沢と学都への指向	P 8
幕末・明治初期における加賀藩校の変遷	P10
コラム3 第四高等中学校の誘致	谷本宗生 P10
IV. 明治初期、金沢における科学教育	P11
明治前期における前身校の変遷(廃藩置県～明治20年ころ)	P12
コラム4 オランダ医学からドイツ医学への移り変わり	板垣英治 P13
関連年表(創基から第四高等中学校医学部薬学科付設まで 1862～1889)	P14
関連地図	P15
出品目録	P16

I 金沢大学の源流

1949(昭和24)年、8つの前身校が統合されて金沢大学が誕生しました。この前身校の歴史の長さはまちまちですが、源流から数えると80年前後に達するという大きな流れが3つ存在しました。1862(文久2)年の加賀藩種痘所の開設に始まり金沢医科大学及び同附属薬学専門部へと伝えられた西洋医学・薬学教育の流れ、幕末期加賀藩における洋学教育の伝統を受け継いだ明治初期の語学学校を嚆矢として第四高等学校へと発展した中等教育・高等専門教育の流れ、1873(明治6)年の石川県による別伝習所の設置に始まり石川師範学校へとつづく師範教育の流れ、の3つです。ここでは、3つの流れの上流部分を紹介します。

①医学教育・薬学教育の系譜

◆加賀藩種痘所——金沢大学の創基 1862(文久2)～1867(慶応3)

金沢に種痘の痘苗が伝えられたのは1850(嘉永3)年であった。その後、津田淳三ら蘭方医たちによって堤町に私設の種痘所が作られて種痘の普及が図られた。1862(文久2)年3月になると、加賀藩は黒川良安らに金沢彦三(もろやま)番丁の反求舎なる建物を付与して種痘所とすることを公認した。これがいわゆる「加賀藩彦三種痘所」の開設である。この種痘所に参画した医師は25名で、彼らの間では接種技術の伝授などの医学教育も行われた。それゆえにこの「加賀藩彦三種痘所」の開設をもって金沢大学の創基とする。

藩公認を契機として種痘は大いに普及し、彦三種痘所は手狭となった。医師たちは移転を藩庁に請い、1864(元治元)年、種痘所は金沢南町心学所に移り藩直轄となった。

◆卯辰山養生所 1867(慶応3)～1870(明治3)

福沢諭吉の『西洋事情』を読んで欧州には施療病院や貧民救済所があることを知った第14代加賀藩主前田慶寧(まへだ けいねい)は、卯辰山に貧民救済病院の建設を計画した。病院は1867(慶応3)年10月に完成し、養生所と名付けられた。加賀藩は種痘所をここに移すとともに、黒川を主附、津田、田中信吾、大田美農里(おおたみ のり)を棟取、高峰元桂(たかみね げんく) (のち精一、高峰讓吉の父)を舎密局総理に任命して、貧民の救療と医学の研究・教育にあたらせた。

◆金沢医学館 1870(明治3)～1873(明治6)

前田慶寧は黒川を長崎に派遣して医学校と病院の制度調査を行わせ、1870(明治3)年2月に養生所から医育機関を大手町の旧津田玄蕃邸に移して、金沢医学館を開設した。創立当初の教師は黒川らであったが、71年、オランダ軍医スロイスを雇い入れ、本格的な西洋医学の教育と治療を始めた。しかし、廃藩置県による変革のため藩立医学館は72年に閉鎖。津田・大田・田中らは県に請願して建物・機器を借り、私財を投じて私立医学館を維持した。

◆理化学学校 1871(明治4)～1872(明治5)

医学館は2年目に入ると入学希望者が増加したため、基礎教育たる理化学教育を分離し、1871年7月、兼六園内に理化学学校を開設した。しかし、廃藩置県による変革のため翌年閉校した。

◆金沢病院・金沢医学所・金沢医学校 1873(明治6)～1884(明治17)

1873年、文部省の指導により医学館は金沢病院と改称した。75年には県に移管されて本県最初の公立病院となり、翌年には病院から医育部門が分離されて公立の石川県金沢医学所が誕生した。75年にはオランダ人医師ホルトルマンが着任し、78年の明治天皇の行幸の際には彼の診察指導を見学された。79年6月には金沢病院が隣接地に新設され、広くなった医学所はさらなる充実のため、同年11月医学校と改称した。

◆石川県甲種医学校 1884(明治17)～1888(明治21)

1882年、政府は医学校通則を改正し、医学校を甲乙に分け、甲種には東京大学にてドイツ医学を学んだ医学士3名以上の教諭採用を要件とした。金沢医学校も東大出身の医学士3名を採用し、84年に甲種医学校に昇格した。さらにこれが母体となり、87年8月、全国に5つ設置された官立の高等中学校医学部の1つとして第四高等中学校医学部が開校した。

②中等教育・高等専門教育の系譜

◆英仏学校・英学校・変則専門学校・石川県中学校 1873(明治6)～1876(明治9)

廃藩置県後の1872年、加賀藩校の系譜を引く金沢中学校は廃校となったが、教員有志は伝統を絶やすまいと私立英学義塾を設立した。翌73年、学制が実施体制に入ると、県は中等教育機関の再興に乗り出し、英仏学校を開校して英学義塾の生徒をここに移した。その後、仏語履修者の減少により英学校と改称した。また、学制実施の経過的措置として県は、73年に義務教育適齢外の小学校教育未終了者を対象とする変則学校、及びその進学先としての変則専門学校を設置。75年には両者を統合した変則専門学校と、新たな変則中学校が設置される。これも翌年には統合され、石川県中学校が設置された。

◆啓明学校・石川県中学師範学校 1876(明治9)～1881(明治14)

中学教員の養成が緊急課題となった1875(明治8)年、政府は東京師範学校に中学師範学校を付設することとした。石川県はこれをただちに調査し、76年2月、英学校と石川県中学校を廃止して中学師範学校を設立、校名を啓明学校とした。ただ、目的を明確化しなかったために退学者が多く、翌年には目的を中学教員の養成に再設定し、石川県中学師範学校と改称した。これは東京以外にできた、全国唯一の中学師範学校であった。

◆石川県専門学校 1881(明治14)～1888(明治21)

石川県において中学設置は一向に進まず、中学師範学校は専門教育への転換を検討するようになる。そして1880(明治13)年より教科の再編成をすすみ、翌81年7月、専門教育を目的とし、予備科と法・理・文の3学科を有する石川県専門学校に改制した。

86年、文部省は中学校令を公布し、全国5地区に1校ずつ高等中学校を設置することとした。石川県は誘致運動を積極的に展開し、それに成功する。こうして第四高等中学校は石川県専門学校の資産を受け継いで87年10月に開校し、第四高等学校へと発展していく。

③師範教育の系譜

◆別伝習所・石川県集成学校 1873(明治6)～1874(明治7)

1873(明治6)年12月、石川県は小学教員養成のために別伝習所を開設し、小学校上級生のうちの優等な者を選んで生徒とした。これが本県における師範教育の始まりである。県は同時に、官立東京師範学校の規則を調査し、それに基づく教則を作り、74年8月、石川県集成学校を開校した。(別伝習所は集成学校設置計画確定にともない同年5月に閉鎖された。)

◆石川県師範学校・石川県第一師範学校・石川県金沢師範学校 1874(明治7)～1883(明治16)

1874(明治7)年10月、文部省の加納久宜による学事視察があり、そこで集成学校の校名を師範学校としない点を難詰された。そこで県は急遽校名を改め、11月、石川県師範学校とした。以後、県域の変動や支校の設置などに合わせて校名は頻繁に変更されたが、83年11月、女子師範・輪島師範と統合され、石川県師範学校の男子部となった。

◆石川県女子師範学校・石川県第一女子師範学校・石川県金沢女子師範学校

1875(明治8)～1883(明治16)

1875(明治8)年、石川県は幼児教育者の養成を目指して石川県女子師範学校を創設した。女子師範の創設は、官立東京女子師範学校に次ぐもので、府県立としては最初であった。以後、県域の変動や支校の設置などに合わせて校名は頻繁に変更されたが、83年11月、金沢師範学校などと統合され、石川県師範学校の女子部となった。

加賀藩彦三種痘所の開設と平成の跡地推定

山本 博(金沢大学医薬保健研究域教授)

種痘が天然痘という災厄を未然に防ぐとの事績は西洋医学の価値を朝野に知らしめた。牛痘種痘による散発的な善感文政七(1824)年頃より得られていたが、嘉永二(1849)年「長崎ニ舶来セルバタバピアヨリノ牛痘痲ニヨリ、モーニケ Otto Mohnike 及び榑林宗建、三児ニ種痘シ一児ニ成功」¹⁾、この痘苗が諸方に普及、定着した。金沢における種痘は嘉永三(1850)年、黒川良安がバタバピア由来痘苗を長男誠一郎に接種したのがはじまりとされる。加賀藩は、文久元(1861)年、黒川良安に対して種痘を行なうことを正式に許可、翌文久二(1862)年三月、彦三種痘所を開設した。嘉永七(1854)年洋式兵学の調査・研究および教育機関として設立されていた壮猶館所属の黒川良安、津田淳三、大田美農里、高峰元榑、鈴木儀六を含む計二十五名の医師がこれに参画した。医師たちは「無給トシ其種痘所へ収納スル處ノ謝金ハ總テ蓄積シ」²⁾、金参拾五貫目を卯辰山養生所設立のため寄附した。かくして彦三種痘所は、卯辰山養生所を経、金沢医学館、石川県甲種醫学校、第四高等学校医学部、官立金澤醫學専門学校、官立金澤醫科大学、国立金沢大学へと続く系譜の淵源となった。

しかし、彦三種痘所に関して現存する史料は、明治三十六(1903)年高安右人金澤醫學専門学校長から金沢市長に提出された「石川県金澤病院沿革」²⁾が最古にして唯一であり、彦三種痘所の所在地は長らく不明であった。本年平成二十三(2011)年までの約三年間に亘る、赤祖父一知北陸医史学会会長による各年代の金沢絵図、加賀藩組分侍帳、屋敷打渡繪圖等の系統的な調査から、彦三種痘所は旧常福寺上地町、後に旧彦三八番丁、現金沢市安江町1番30・31号付近に存在したものと推定された³⁾。この調査で、弘化嘉永期「金府大繪圖」中、彦三八番丁南端の常福寺上地町に「檢校ヤシキ」と記された区画が元治元(1864)年に十間町組合本町地家作買居として彦三八番丁に組み入れられ、知行高百石の武家室田喜左衛門に移っていることが突き止められた。論文³⁾では、「当時の牛痘種痘法は、痘苗維持のために善感した子供の腕から複数の子供の腕へほぼ一週間の間隔で植え継いで行く方法であった。当然子供と両親への説得が必要であり、また種痘所への出入りは親子同伴が原則であった。したがって種痘所は、武家屋敷地でなく、道路の幅も比較的広く、人の往来が自由にできる町地内に設置されるのが至当なことであった」、「元治元年(一八六四)に藩立種痘所として南町心学所に移るまでの間、彦三八番丁南端の侍屋敷に隣接する十間町組合本町地内にあった建物の一部(多分反求舎と称した)を借り、種痘所を設置した可能性が大きいと考えられた」と考証されている。なお、従来所在地候補として示唆されていた彦三町2丁目安田生命ビル付近や反求を字名とした私塾経営医師橋健堂と彦三種痘所との関係は今回の調査でほぼ否定された。

彦三種痘所は接種技術、痘苗の分苗、保存についての教育と種痘医資格認定の役割も担ったと推定され、慶応三(1867)年には、彦三種痘所を嚆矢とする西洋医学教育・医療と壮猶館で産声を上げた近代医学研究とが卯辰山養生所へと収斂されるところとなる⁴⁾。

文献

- 1) 日本学士院日本科学史刊行会「明治前日本医学史」(増補復刻版)第1巻「近世痘科(並種痘)年表」(1978年(財)日本古医学資料センター発行)
- 2) 寺畑喜朔編「石川県金澤病院沿革」(1984年複製:金沢大学医学部記念館資料室所蔵)
- 3) 赤祖父一知「加賀藩種痘所の変遷(一)「彦三種痘所」—その所在地を求めて」『北陸医史』第33号28-35(2011年)
- 4) 「金沢大学医学部創立150周年記念誌」(準備中:2012年発行予定)



彦三種痘所跡地と推定される現金沢市安江町1番30・31号付近には、現在彦三郵便局が建っている。

II 金沢大学創基のころ～加賀藩種痘所の開設とその背景～

1862(文久2)年、加賀藩公認の彦三種痘所が開設され、ここに金沢大学に至る大きな流れが始まります。しかし、泉の湧き出る背後に地下水脈があるように、加賀藩種痘所の開設は突然の出来事ではありません。そこには、加賀藩におけるオランダ医学の普及とそれに努めた人々の努力、そして時代の流れがありました。ここでは、加賀藩種痘所がいかなる歴史的な脈のなかで登場したかを、それに尽力した人々の息吹を織り込みながら、見ていきます。

①加賀藩における洋学教育の伝統

1630年代に西洋との交渉がオランダ一国となってより、西洋の学問・文化・科学技術(洋学)の日本への流入はオランダを介して行われ、それゆえに洋学はもっぱら蘭学の名で呼ばれた。学者による蘭学学習は8代将軍徳川吉宗(在職:1716～45)の実学奨励からはじまり、田沼時代(1772～86)の重商主義的雰囲気の中で広がりを見せていった。とりわけ若狭小浜藩医杉田玄白らによる『解体新書』の翻訳・刊行(1774)は蘭学発展の大きな契機となり、その弟子大槻玄沢の蘭学塾芝蘭堂(開塾1786)は蘭学の全国普及に大きな役割を果たした。その後、ロシア等外国船の来航と世界情勢の変化を背景に、蘭学は医学・語学から地理学・天文学・数学等さまざまな分野に普及が拡大し、アヘン戦争(1840～42)後には、対外危機意識の高まりのなかで軍事科学が幕府・諸藩に取り入れられ、武士階級へも広まっていった。開国(1854)以降、欧米列強との接触が拡大するに従って、英語・仏語・独語等の必要性が増大し、その文化もオランダを介さずに摂取されるようになると、蘭学の名は消えて洋学の名がもっぱらになっていった。

こうした日本の全体状況のなか、加賀藩も蘭学を比較的早くより導入した。その最初は、第12代藩主前田斉広が前藩主治脩の治療のために大槻に学んだ宇田川玄真を金沢に招いたこと(1808)で、彼は治療を終えて帰るに当たり、門弟の藤井方亭・吉田長淑を藩に推薦し、彼らは江戸詰となった。また、外国事情と富国強兵を説いた経世思想家本多利明の金沢滞在(1809～10)も大きな影響を与え、その後の加賀藩における西洋科学技術の導入・振興の雰囲気を生み出した。

こうした背景のもと、ペリー来航(1853)を契機に、加賀藩は金沢柿木畠にあった洋学の私設機関を接収して西洋流火術方役所を設置、翌年には壮猶館と改称した。ここは洋式軍事全般についての役所であったが、その一部に洋式武学校としての側面があった。ここでは、砲術・合図・洋学・医学・航海学・測量学・馬術などが教授され、また語学教育も行われた。語学を担当した翻訳方には黒川良安ら蘭方医が配置されて兵学書の翻訳を行ったが、翻訳方はそこからさらに発展して蘭書会読を始め、やがて1862(文久2)年6月からの黒川らによる医学書会読につながっていく。1861年に大村益次郎の塾頭をつとめた安達幸之助が翻訳方に加わると英学も始められ、その後、仏学も取り入れられた。こうした壮猶館における洋学教育の流れは、明治初期における各種洋学校の設置へとつながっていく。



解体新書(金沢大学医学部記念館蔵)



芝蘭堂新元会図
(別名 オランダ正月。金沢大学医学部記念館蔵)



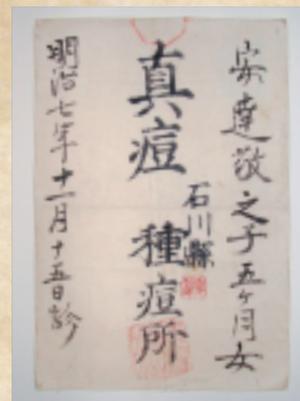
壮猶館跡。現在、石川県知事公舎。

②種痘所の開設と黒川良安^{まさやす}

1980年に根絶宣言がなされた天然痘^{てんねんとう}（抱瘡、痘瘡ともいう）は、かつては死に至る病として最も恐れられた伝染病であった。一方、天然痘が強い免疫力をもつことは古くから知られ、それを利用して患者の膿^{うみ}を健康人に接種して軽度の発症を起こさせ免疫を得る予防法（人痘法）がインド・中国・トルコで行われ、日本にも伝えられた。しかし、重症化して死亡することも稀でなく、安全な予防法ではなかった。これに対し、牛の天然痘である牛痘の膿を用いた安全な種痘法（牛痘法）を考案したのがイギリス人医師エドワード・ジェンナーで、時に1796年のことであった。以後、牛痘法は世界に普及し、日本では1849年（嘉永2）の長崎オランダ商館付医師モーニケによる牛痘苗輸入の成功が起点となった。

北陸へは福井の医師笠原良策^{かさはらりょうさく}によって同年末にもたらされた。翌年その分苗が金沢にもたらされ、2月16日に黒川良安らにより最初の種痘が行われた。55（安政2）年には津田淳三らにより私立の堤町種痘所が設立され、ついで62（文久2）年には藩公認の種痘所が金沢彦三に設立され、藩医であった黒川らに堤町種痘所の医師たちも加わり、総勢25名の医師がその任にあたった。これが本学の始まりになることは既述の通りである。

加賀藩において、この種痘普及だけでなく、蘭方医学や洋学全般の普及にも非常に大きな役割を果たしたのが、黒川良安である。黒川は越中新川郡黒川村（現、富山県中新川郡上市町）に生まれ、1828（文政11）年に父に従って長崎に行き、シーボルトの通訳吉雄権之助^{よしおごん の すけ}に蘭学を学んだ。40（天保11）年、長崎からの帰路、金沢にて執政青山将監^{あおやま}に召抱えられ、翌年江戸に遊学。蘭方医坪井信道^{つばい しんどう}に入門して塾頭となった。46（弘化3）年藩医となり、52（嘉永5）年には藩命で河北潟魚類死滅事件を調査・報告し、これがわが国最初の水質検査といわれる。54（安政元）年に壮猶館が開設されるとその翻訳方も兼務。種痘所では棟取、それが発展した養生所でも主附を兼務し、68（明治元）年には藩主の命を受けて医学校・病院制度の調査のために長崎に赴き、キンストレーキなどを持ち帰った。70年医学館が開設されると総督医となったが、翌年にオランダ軍医スロイスが赴任し、廃藩置県で主君前田慶寧^{よしやす}が金沢を去ると、彼も職を辞した。黒川は当時の北陸蘭学界におけるスーパースターともいべき存在であり、今も北陸近代医学の祖と称えられている。



石川県種痘所の種痘診断書
（1874（明治7）年。石川県立歴史博物館蔵）



『黒川良安由緒書』（1870（明治3）年。
金沢市立玉川図書館近世史料館蔵）



黒川良安旧蔵の合信（ホブソン）著『婦嬰新説』（1859（安政6）年。金沢大学附属中央図書館蔵）。下巻巻頭に「黒川良安圖書之記」という蔵書印が押されている。



黒川良安肖像盾牌（金沢大学医学部記念館蔵）。1969（昭和44）年に上市町厚生病院が増改築落成記念の品として製作配布したもの。

◆種痘関連年表

1796	イギリス人医師ジェンナー、牛痘法に成功	1855 (安政2) 津田淳三ら金沢堤町に私立の種痘所開設
1847 (弘化4)	日本で天然痘大流行。種痘法輸入の契機	1858 (安政5) 蘭方医らの出資により、江戸お玉が池に 私立の種痘所開設 (=東京大学医学部の始まり)
1848 (嘉永元)	福井藩と佐賀藩が牛痘苗輸入を計画	1862 (文久2) 金沢彦三に加賀藩公認の種痘所開設 (=金沢大学の始まり)
1849 (嘉永2)	7月、佐賀藩の要請を受けたオランダ商館付医師 モーニックが長崎にて牛痘に成功。 8月、佐賀に伝苗。 9月、京の日野鼎哉のもとに伝苗。 11月、日野、京に除痘館(種痘所)開設。緒方洪庵、大 坂に除痘館を開設し日野より伝苗。笠原良策、 日野より分苗を受け雪の栃ノ木峠を越えて福井 へ伝苗し除痘館開設。	1864 (元治元) 種痘所、金沢南町に移転し藩直轄となる 1909 (明治41) 「種痘法」施行 1955 (昭和30) 日本における天然痘独自発生最後の最後 1958 (昭和33) WHO総会にて世界天然痘撲滅計画可決 1976 (昭和51) 以降、種痘廃止 1980 (昭和55) WHOが天然痘撲滅を宣言
1850 (嘉永2)	2月、黒川良安ら福井より分苗を受け金沢にて種痘 に成功。	

2 コラム

幕末の加賀藩

宮下 和幸 (金沢市立玉川図書館近世史料館)

加賀藩は、幕藩体制において御三家に次ぐ家格を有し、改作法などの諸政策により安定的な藩体制を実現していたが、近世中後期においては深刻な藩財政の悪化や異国船に対する警備問題など、藩をとりまく状況は不穏なものとなっていった。

文久期に入り、朝廷・幕府・諸藩をまきこんで最高国家意思となる国是の樹立運動が本格的に展開しはじめると、加賀藩も中央政局への介入を意識することになる。加賀藩は、孝明天皇の勸諭である攘夷を軸に朝廷と幕府(以下、諸大名)が一和する体制(公武一和)の構築を藩の最高意思(藩是)とし、藩主前田斉泰以下、藩士達は京都を舞台に政治運動を展開した。

元治元年(1864)7月19日に発生した禁門の変において、世嗣前田慶寧が京都警衛任務を放棄する形で退京するなど、在京藩士の対応により藩は苦しい立場となったが、当該期は軍艦の購入や百姓を中心とした銃卒稽古の実施、大砲隊の編成など藩軍事力の強化に努める一方で、藩士子弟を藩費で長崎へ留学させるなど人材育成にも力を注いでおり、慶応2年(1866)には高峰讓吉が僅か13歳で長崎に向かっている。

慶応2年4月に慶寧が家督を相続すると、西洋式銃隊への軍事力編制に取り組む傍ら、藩主としては異例の御救小屋視察、そして黒川良安を主附とする卯辰山養生所の建設など、藩内改革を推進した。中央政局に対しては、徳川家との関係を重視した政治路線を歩み、幕府老中、京都守護職、摂政などから情報を入手し、情勢への対応を図っている。

しかし、大政奉還、王政復古の大号令と時勢が推移するなかで、徳川家を中心とした公武一和体制が皇国の為となるのか否かで藩是は大きく揺らぎ、翌年の鳥羽・伏見の戦が発生すると、徳川家への尽力が皇国の為とならないことが明確になったことで徳川家と袂を分かつことを選択した。そして、維新政府の命を受けた加賀藩は、割場附足軽クラスによる部隊を編成して本格的に北越戦争に参加し、長岡藩と激しい戦闘を繰り広げた。

その後、明治初年の改革により少禄の者が藩政に登用されるなど、藩体制は大きく変容し、安達幸之助や安井和介のような維新政府に登用される者もあらわれ、「列藩の標的」となるよう対応を続けた加賀藩は、版籍奉還をへて廃藩置県により明治4年(1871)7月に終焉を迎えることになった。

III 幕末・明治初期の金沢と学都への指向

幕末の動乱のなか、加賀藩は上手に立ちまわれませんでした。西洋の軍事技術を導入し海軍創設構想まで持ちながら、日和見主義と評され、明治新政府のもとでは著しく立場を弱くしました。版籍奉還(1869)、廃藩置県(1871)、それにつづく県庁の美川への一時移転(1872~73)は、三都につぐ大都市とうたわれた金沢を衰微させ、人口減少と経済崩壊にあえぐ時代が来ます。その一方、幕末の加賀藩は人材育成に熱心で、維新直後の道済館・医学館などの藩営諸学校の開校には新政府の教育改革に先行するユニークな側面もありました。その教育への気概と先進性は石川県に引き継がれ、中学師範学校や女子師範学校などは東京の官立学校に次ぐ開校で、公立唯一あるいは公立初とされ、また、専門学校も北陸で唯一石川県だけが設置しました。そこには大藩加賀藩以来の底力と誇り、衰微を人材育成の面から食い止めようとする動きがあり、それは第四高等中学校の誘致成功(1887)につながり、「学都」金沢が形成されていきます。ここでは、第四高等中学校誘致までの諸学校のありようを、そこで活躍した人々の事績とともに見ていきます。なお、この「学都」の伝統は現在にも継承され、石川県は人口当たりの高等教育機関数全国2位、学生数全国3位です。

① 養生所から医学校へ

前田慶寧による藩政改革の一環として行われた卯辰山養生所の開設(1867)は、金沢における最初の病院開設であった。慶寧には医学校建設の意向があり、黒川良安を長崎に派遣して制度調査に当たらせ、1870(明治3)年、医学館が開設された。同時に加賀藩は本格的な西洋医学導入のためオランダ人医師の雇用を決め、翌年オランダ人軍医スロイスが金沢に赴任し、医学館の一等教師となった。彼は限られた年月で医学教育を行うため医学館学則を改正し、最新の医学を教授した。

黒川の引退後、医学館の運営は二等教師であった津田淳三、大田美農里、田中しんごが行った。廃藩置県で資金源が断たれ、医学館が存亡の危機に陥ると、津田らは知事に請願して建物・機器を借用するとともに、私財をもってこれを維持し、総経費の半分を占めたスロイスの給与も彼らが支払った。一年後、県からの補助が得られて半官半民となり、75年に県に移管された。しかし、スロイスの滞在延長は許されず、新たな外国人医師を雇うことになり、オランダ人医師ホルトルマンが75年7月に赴任する。彼はスロイスが講義しなかった学科を講義し、その内容は非常に綿密であった。彼は79年に金沢を離れ、翌年帰国した。

76年、病院と医育機関が分離され、大田が石川県病院長、田中が医学所長となった。津田はこの年引退、80年には大田も引退し、創設以来の人物は田中だけとなった。この頃、明治政府はドイツ医学を選択して、東京大学医学部にドイツから教師を雇用してドイツ医学の教育を行った。79年、県は医学所を医学校に改め、ドイツ医学の採用を決め、田中を校長兼病院御用掛に任命し、上京を命じて学事調査をさせた。この時田中は、新築の金沢病院のために県令千坂高雅とともに三条実美を訪ね、病院額の揮毫を依頼して許された。

82年明治政府はドイツ医学を学んだ医師を短期間で養成するため、甲種医学校の制度を作った。甲種医学校への昇格には東京大学医学部卒の学士3名を採用して一等教諭にすることが必要条件となり、木村孝蔵ら3名の医学士が着任して、84年3月に石川県甲種医学校がスタートした。当初、校長は田中であったが、11月に中濱東一郎が着任したことが契機となって、従来からのオランダ医学を学んだ医師との間に激しい軋轢が生じ、12月田中は依願退職し、翌年1月にともに退職した



津田淳三肖像画
(早田楽齋画、金沢大学医学部記念館蔵)



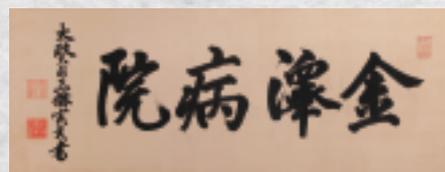
大田美農里肖像画
(早田楽齋画、金沢大学医学部記念館蔵)



田中しんご肖像画
(早田楽齋画、金沢大学医学部記念館蔵)

医師たちと石川県最初の私立病院である尾山病院を開業した。こうして甲種医学校におけるドイツ医学教育への移行が完了したが、その講義内容は東大医学部の講義録によるもので、新鮮味には欠けていた。

87年、第四高等中学校医学部が開設されると、甲種医学校はその中に組み込まれ、やがて金沢医学専門学校、金沢医科大学、金沢大学医学部へと発展していく。



三条実美揮毫の「金沢病院扁額」(金沢大学医学部記念館蔵)。本特別展では、これをもとに作られた木製額を展示している。

②藩校から官立高等中学校・師範学校へ

多様な側面をもっていた^{そうゆうかん}壮猶館は、加賀藩の軍制改革により、1868(明治元)年に軍艦所などが海防方に移され、かつ旧来の武学校・^{けいぶかん}経武館と合併して学校總裁の支配下に入ったことで、洋式武学校色が強くなった。一方、幕末の英仏との外交関係の深化は英仏学重視の傾向を生み、藩は、^{ぼしんせんそう}戊辰戦争で戻ってきた藩留学生らが作った英仏学塾を公認し、68年^{どうせいかん}道濟館と命名した。その後レベルによる分化がなされたが、新政府が中学規則を発表すると、藩はこれに基づき各種洋学校をまとめて中学東校とした。

廃藩置県後も県は藩立中学校維持の方針を示し、皇漢学の中学西校と合併させて金沢中学校を設置し、最高学府を目指す動きもあった。しかしまもなく方針が変わり、廃校となる。教員有志は伝統を絶やすまいと私立英学義塾を作り、これが母体となって県の中等教育機関再興のなかで県立英仏学校(のち英学校)が開校した。これと、学制実施の経過的措置で生まれた変則学校の系譜をひく石川県中学校を統合し、76年、県は全国唯一の公立中学師範学校である啓明学校(翌年、石川県中学師範学校に改名)を設置した。しかし、県内における中学設立が進まないため専門教育に方向転換し、81年には石川県専門学校となった。ここには多くの俊秀が集まり、^{きむらりさしにしだ}木村栄、^{きんたろう}西田幾多郎、^{すずきだいせつ}鈴木大拙など後世に名を残した者も少なくない。大学進学者も多く、83・4年の東京大学の一覧によれば、石川県出身者数は東京に次いで全国2位であった。こうした熱意と実績が87年の第四高等中学校設置につながり、専門学校の資産も第四高等中学校に引き継がれる。ただし、発足当時の第四高等中学校では、校長以下九州出身者が中核を占めたため、当時の人々に藩校の伝統が専門学校閉校で区切れるとの認識があった点は注意しておきたい。

このような県と県民の教育への熱意は師範教育にも現れている。学制公布で必要となった小学教員養成のため別伝習所をまず設置し、同時に官立東京師範学校の学則を調査してすぐに集成学校に転換したことや、女兒小学校の設置により女性教員養成が必要と見ると公立初的女子師範学校を設置したことなどが、それである。こうした熱意が「学都」金沢を育てていったのである。



関口開著『数学問題集』(1871(明治4)年。石川県立歴史博物館蔵)。金沢で初めて出版された西洋数学の書。その扉には「金沢学校」とあるが、「金沢中学校」を指すとみられる。関口は当時ここで教鞭を取っていた。

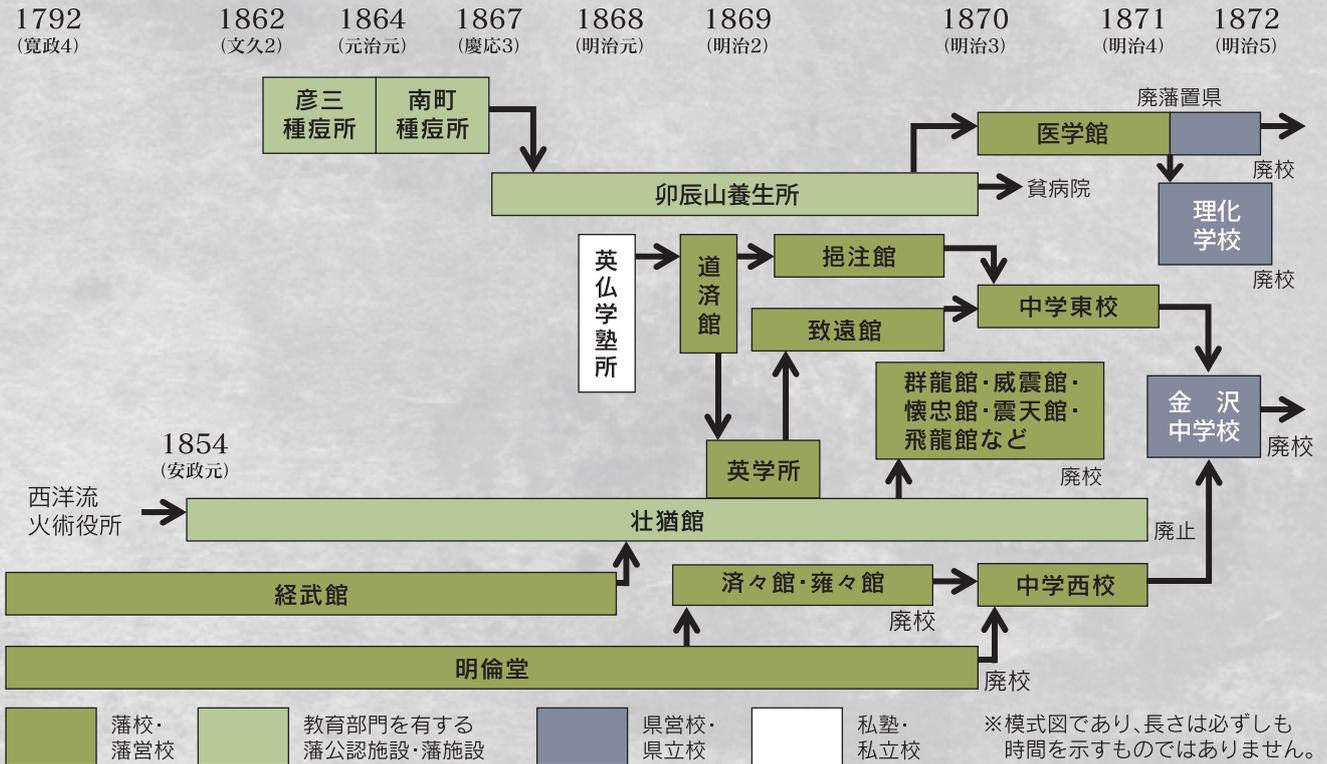


「加賀金沢細見図」(1876(明治9)年。金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)。「ケイメイカウ」「シハンカウ」「同女」「病院」などの記載で、啓明学校、石川県師範学校、石川県女子師範学校、金沢医学館の場所が示されている。



石川県専門学校生徒写真(1886(明治19)年。金沢ふるさと偉人館蔵)。写真の裏書によれば、井上友一、鈴木大拙、藤岡作太郎らが写っている。

◆幕末・明治初期における加賀藩校の変遷



3 コラム

第四高等中学校の誘致

谷本 宗生 (東京大学史料室)

一八八六(明治十九)年四月の「中学校令」公布によって、全国を五つの学区に分けてそれぞれ高等中学校を設置するとした。学区の地域割りや高等中学校の設置場所については、文部大臣が追って定めるものとした。そして、高等中学校の運営経費は国庫と学区の地方税とで折半で負担するとされた。このような中央政策の動向を踏まえて、全国でも他地域に先駆けて石川県は高等中学校の誘致に乗り出していくのである。

高等中学校は、各県単位で設置運営される尋常中学校の上級教育機関にあたり、帝国大学への進学予科の機能を担うものであった。また進学予科の本科に加え、地域社会における医学・薬学といった専門教育を行う機能として、専門部も併設した。一八八六年五月には、石川県会の河瀬貫一郎や真館貞造らが誘致の陳情に東京に赴いている。また視察に金沢を訪れた文部省学務局長の折田彦一や文部次官の辻新次らに対して、県当局や専門学校関係者らが挙げて鏝甚や山乃尾で相応にもてなしている。一八八六年十一月末、文部省はようやく高等中学校の学区や高等中学校の設置場所などを公表した。新潟県・福井県・富山県・石川県の四県は第四区に指定され、石川県の金沢に高等中学校を設置すると規定したのである。翌八七(明治二十)年四月の文部省告示によって、金沢に設置される高等中学校は、第四高等中学校と称された。第一：東京、第二：仙台、第三：京都、第四：金沢、第五：熊本。医学部の設置場所は、次のとおり。第一：千葉、第二：仙台、第三：岡山、第四：金沢、第五：長崎。

高等教育・専門教育を永続的に維持運営していくためには、官立の高等中学校制度の指定を受けること＝第四高等中学校の誘致が望ましいと石川県としては判断したといえる。第四区の新潟や福井県では、県の医学校が突然廃止され地元の医学教育に支障が生じたという。第四高等中学校の設置経費は、県の地方税から一切支出することなく、前田家や地元有志らからの寄附金で賄ったのである。もしも第四高等中学校の誘致が行われなかったとしても、私設の各種学校というかたちでも地元金沢で高等教育・専門教育の系譜をなんとか維持しようと試みたであろうと想像できる。石川県専門学校や石川県甲種医学校の存在、高等教育・専門教育の系譜があって、第四高等中学校は石川県の金沢に誘致された。当初国庫と地方税との折半負担であった高等中学校の運営経費も、後に地元地域が望むとおり国庫支弁のみとなった。

③実験機器

近代科学教育、とりわけその基礎をなす物理学教育において実験は欠かすことのできないものだが、科学教育の黎明期である明治初期にはそのための機器が不足していたことは言うまでもない。これを補うために、文部省は実験機器を輸入するとともに、それをもとにして国内の業者に国産品を作らせ、1878(明治11)年、これらを全国の公立師範学校に一齐交付した。石川県中学師範学校にもそれらが交付され、それは石川県専門学校、さらには第四高等中学校・第四高等学校、そして金沢大学へと引き継がれ、その一部は現存する。全国に交付された文部省交付実験機器のうち現存するのは唯一金沢大学へ伝えられたこれらだけであり、貴重な科学遺産である。

石川県専門学校以降に購入された実験機器を加え、第四高等学校から金沢大学に引き継がれた物理実験機器は1993(平成5)年時点で794点が確認されている。しかし、この年の城内キャンパスから角間キャンパスへの移転にあたり、本資料館と石川県自然史資料館に分けられることになり、本資料館には92点が移管された。このうち石川県専門学校からの機器は8点、さらにそのうちの4点が中学師範学校以来の文部省交付実験機器である。そのなかには明治天皇の中学師範学校視察の際の実験で使用された「電信機雛型」の一部である「電信機模型」も含まれている。今回の展示では、本館所蔵の石川県専門学校物理実験機器8点すべてを展示する。



マグデハルグ半球(本館蔵)。本機器には米Ritchie社の社名が認められ、文部省が輸入して交付した機器であることがわかる。

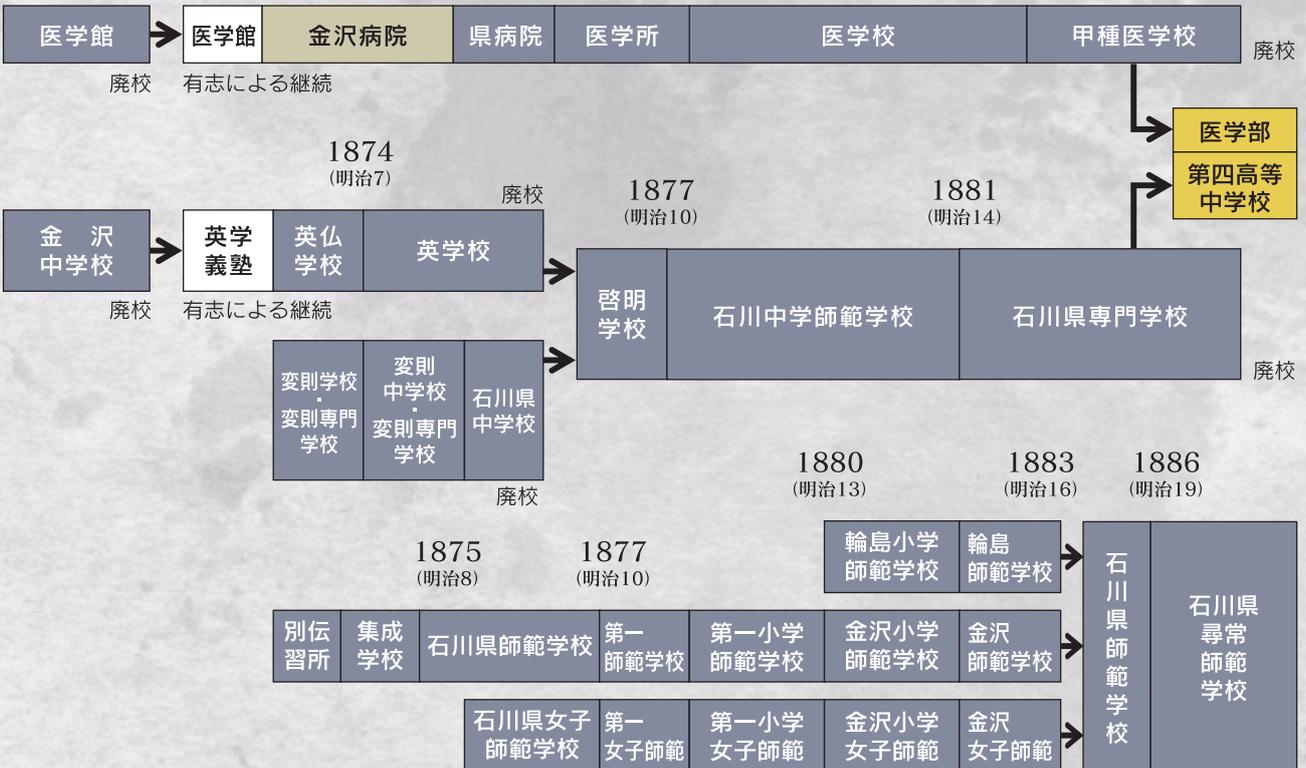


電信機模型(本館蔵)。モールス書記式電信機の簡単な模型。文部省交付物理機器のひとつ。

◆明治初期における前身校の変遷(廃藩置県～明治20年ごろ)

1871 (明治4) 1872 (明治5) 1873 (明治6) 1875 (明治8) 1876 (明治9) 1879 (明治12) 1884 (明治17) 1887 (明治20) 1888 (明治21)

廃藩置県



 官立学校
 県営校・県立校
 半公立校
 私塾・私立校

※一部の校名は省略名で記してある

オランダ医学からドイツ医学への移りかわり

板垣 英治(金沢大学名誉教授)

金沢で西洋医学の本格的な教育は明治4年3月に加賀藩医学館(金沢市大手町)に、オランダ陸軍一等軍医P.A.J.SLUYSによる、医学基礎学科から臨床学科までのオランダ医学の講義である。スロイスはオランダ語で講義を行い、通訳が翻訳し、これを生徒(9名)が書き取っていた。生徒の一人、藤本純吉筆記の全学科目の講義録が現存し、当時の医学講義の内容を知ることが出来る。さらにスロイス使用の医学書が現在、本学図書館に保存されている。明治4年7月の廃藩置県による財政危機を凌ぎ、明治6年4月に石川県立金沢病院と医学所となった。ここから明治17年までに82名の内務省医師開業免許を取得した卒業生を送り出した。処が、明治政府は明治15年5月に「医学校通則」を布告して、ドイツ医学の促進のため甲種医学校の制度を施行した。新制度では東京大学医学部卒の医学士3名を一等教諭に採用すること。ドイツ医学を日本語で教授することを定め、卒業と同時に医師開業免許を与えた。さらに病院は分科制となり、外科・内科・眼科の診療科が置かれた。明治17年3月に田中信吾を校長として、木村孝蔵(外科、16年卒)と山崎兵四郎(眼科、17年卒)の一等教諭の着任で、「石川県甲種医学校」が生まれた。ここに17年11月に岡山県甲種医学校から中浜東一郎(内科、14年卒)が政治的人事により転入して、田中に変更校長に就任した。大学を卒業して僅かの経験しかない者が一等教諭になる人事が行われたことは、田中等従来からの医師には受け入れ難い事であり、大きな軋轢をなした。その結果、オランダ医学を学んで来た医師達はこの医学校を辞職して、新たに「尾山病院」を建設し、明治18年1月に開院した。経験の浅い医師の居る金沢病院と経験の豊かな医師の居る尾山病院では患者の選択眼は厳しく、田中院長の尾山病院は非常に盛況となった。ドイツ医学を学んだ医師達が認められるには多くの月日が必要であった。甲種医学校は明治20年3月末で閉校となり、第四高等学校医学部にバトン移して、明治25年以後になって患者数の増加が認められた。問題の本質はオランダ医学とドイツ医学の違いではなく、甲種医学校の制度と人事の問題で有ったのである。甲種医学校の発足は難産であったのである。

◆「金大事始」関連年表(創基から第四高等学校医学部薬学科付設まで、1862～1889)

西暦	年号	金沢大学の源流校・前身校関係の出来事	地域・日本の動き
1862	文久2	3月、加賀藩認可の種痘所が、金沢彦三八番丁に開設される(=金沢大学の創基)。6月、壮猶館において蘭医書会読始まる。	生麦事件
1863	文久3		薩英戦争
1864	元治元	彦三種痘所を南町に移転し、加賀藩直轄とする。	禁門の変。第1次長州征伐
1865	慶応元		
1866	慶応2		薩長同盟。 第2次長州征伐
1867	慶応3	10月、加賀藩、卯辰山に養生所を開設し、製薬所(舎密局)と薬圃を付設。種痘所を養生所に移転。	前田慶寧、第14代加賀藩主となる。大政奉還。王政復古 戊辰戦争(～69)。5カ条の誓文
1868	明治元	閏4月、加賀藩、戊辰戦争で引き揚げてきた江戸遊学生の設定した英仏学塾所を公認し、道済館と命名。7月、藩主前田慶寧、黒川良安を長崎に派遣し、医学校・病院の制度を調査させる。9月、経武館を壮猶館に合併。	
1869	明治2	3月、加賀藩、威震館等6専門館を設置。5月、黒川良安、キンストレーキ等を携えて帰沢。壮猶館内に英学所を開設し、道済館の年少英学生を移し、ついで独立して致遠館と称す。また、道済館の年長組のために別に挹注館を設立。12月、英人オズボーンを招き、英学所より生徒を分けて七尾語学所を設置。	版籍奉還。加賀藩、職制・軍制を改革
1870	明治3	2月、加賀藩、卯辰山養生所より医育部門を分離し、金沢大手町旧津田玄蕃邸に金沢医学館を開設。七尾語学所を廃して致遠館に併合。12月、明倫堂を廃して旧明倫堂・経武館を校舎に中学西校を、致遠館・挹注館を統合して巽御殿(成巽閣)を校舎に中学東校を開校。12月、医学館内に病院を付設。	
1871	明治4	4月、オランダ軍医スロイスが医学館に着任。7月、壮猶館廃止。7月、医学館の理化学教育を分離し、兼六園内時雨亭跡に理化学学校を設立。11月、金沢県、中学東校・中学西校を合併し、中学西校校舎にて金沢中学校を開校。	廃藩置県。金沢県設置。
1872	明治5	4月、石川県、金沢中学校、医学館、理化学学校を閉校。中学校教員有志ら、私立英学義塾を中学東校跡に設立。医学館医員有志ら、経営を継承し私立金沢医学館を開設。	金沢県を石川県に改称し県庁を美川に移転。学制制定。
1873	明治6	1月、変則学校を中学校跡に設置。2月、石川県、英仏学校を巽御殿に設置し、私立英学義塾の生徒を移す。5月、変則専門学校を英仏学校内に設置。8月、金沢医学館、文部省の指導により金沢病院と改称。12月、別伝習所を旧経武館を校舎に設置し、小学校教員養成を開始。	県庁を金沢に復歸。徴兵令布告。地租改正
1874	明治7	5月、石川県、英仏学校を英学校に改称。8月、英学校内に石川県集成学校を設置し、別伝習所より小学校教員養成を引き継ぐ。8月、変則学校と変則専門学校を合わせて仙石町に変則専門学校を置き、また変則中学校を仙石町に置く。10月、変則専門学校・変則中学校と集成学校を交換移転。11月、石川県集成学校を石川県師範学校に改称。	台湾出兵。兼六園を公園とし、正式開放。
1875	明治8	5月、石川県、西町の公立松原町女児小学校内に石川県女子師範学校を設置。6月、金沢病院が県に移管され、石川県病院に改称。7月、スロイスの後任としてオランダ人医師ホルトルマンが石川県病院に着任。8月、変則中学校・変則専門学校を合わせて石川県中学校とする。	金沢城内に第7連隊司令部設置。尾山神社の神門竣工。江華島事件
1876	明治9	2月、石川県中学校および英学校を廃止し、金沢仙石町に公立の中学師範学校を設置し、校名を啓明学校とする。8月、石川県病院から医育部門が分離されて石川県医学所となり、薬局学科(薬舗学科)を付設。	日朝修好条規調印。石川県の県域に越中・越前が組み込まれる
1877	明治10	2月、石川県病院を石川県金沢病院に、石川県医学所を石川県金沢医学所に改称。2月、石川県師範学校・同女子師範学校を、石川県第一師範学校・同第一女子師範学校と改称。7月、石川県第一小学師範学校・同第一小学師範学校に改称。7月、啓明学校を石川県中学師範学校と改称。	西南戦争
1878	明治11	10月、明治天皇、中学師範学校・第一小学師範学校および金沢医学所に行幸。	島田一郎ら大久保利通暗殺 琉球処分
1879	明治12	6月、石川県金沢病院を殿町旧松平大式邸跡に新築。6月、ホルトルマン辞任し新潟医学校に転じる。11月、石川県金沢医学所を石川県金沢医学校と改称。	
1880	明治13	4月、オーストリア人医師ローレッツ、医学校に着任。7月、石川県第一小学師範学校・同第一女子小学師範学校を石川県金沢小学師範学校・同金沢女子小学師範学校と改称。8月、石川県輪島小学師範学校を設置。8月、ローレッツ、金沢を去る。	
1881	明治14	7月、石川県中学師範学校を石川県専門学校と改称。10月、石川県金沢小学師範学校・同金沢女子小学師範学校を石川県金沢師範学校・同金沢女子師範学校と改称。	第7連隊兵舎より失火し城内ほぼ全焼。石川県から福井県を分離。自由党結成
1882	明治15	1月、金沢病院が金沢医学校の臨床実習場となる。	立憲改進党結成
1883	明治16	11月、輪島師範学校および金沢女子師範学校を金沢師範学校に合併し、石川県師範学校と改称。	石川県から富山県を分離
1884	明治17	3月、石川県金沢医学校が石川県甲種医学校に昇格。12月、田中信吾ら医学校を辞職。	
1885	明治18	2月、田中信吾ら私立尾山病院を開院。	内閣設置。金沢城内に第6旅団司令部設置
1886	明治19	10月、石川県師範学校を石川県尋常師範学校と改称。	帝国大学令・小学校令・中学校令・師範学校令公布
1887	明治20	4月、金沢に第四高等学校を設置。8月、第四高等学校医学部を設置。10月、第四高等学校の開校式を挙行し、森有礼文部大臣来校。石川県専門学校の校舎の一部を借りて授業開始。	
1888	明治21	1月、堤従清・亀田伊右衛門ら私立石川薬館内に私立薬学講習所を開設。3月、石川県専門学校および石川県甲種医学校を廃校。4月、第四高等学校医学部、石川県甲種医学校校舎を借用して授業開始。8月、石川県専門学校および石川県甲種医学校の敷地校舎および資産を第四高等学校に引継ぎ、第四高等学校本部を石川県専門学校跡に、医学部を石川県甲種医学校跡に置く。	
1889	明治22	4月、第四高等学校医学部に薬学科を付設。5月、金沢医学会結成。11月、石川県尋常師範学校が広坂通りの新校舎(現、21世紀美術館)に移転。	大日本帝国憲法公布。金沢市制施行

◆「金大始」関連地図

1 ◆彦三種痘所 金沢大学創基の地
 1862(文久2)~64(元治元)
 当時、十間町組合本町地
 現、金沢彦三郵便局



2 ◆石川県金沢病院
 1879(明治12)~1905(明治38)
 当時、旧松平大式邸跡地
 現、NHK金沢放送局

**3 ◆金沢医学館~金沢病院
 ~医学所~医学校
 ~甲種医学校
 ~第四高等中学校医学部
 ~第四高等学校医学部
 ~金沢医学専門学校**
 1870(明治3)~1912(明治45)
 当時、旧津田玄蕃邸
 現、金沢市医師会館・金沢健康プラザ大手町



旧金沢医学館校舎は移設され、兼六園管理事務所分室として現存(10)の上

5 ◆致遠館
 1869(明治2)~70(明治3)

◆石川県女子師範学校
 1875(明治8)
 当時、元神護寺 現、大谷廟所

4 ◆私立尾山病院
 1885(明治18)~1917(大正6)

6 ◆卯辰山養生所
 1867(慶応3)~70(明治3)
 現、金沢市末広町1

7 ◆卯辰山養生所薬園
 1867(慶応3)~70(明治3)
 現、金沢市山野草園

8 ◆南町種痘所
 1864(元治元)~67(慶応3)

◆英仏学塾所~道済館
 1868(明治元)~69(明治2)
 当時、畳屋九郎兵衛店(南町心学所)
 現、北國新聞社本社ビル敷地北東隅



9 ◆理化学学校
 1871(明治4)~72(明治5)
 当時、兼六園時雨亭 現、跡地

10 ◆旧金沢医学館校舎(3参照)

11 ◆中学西校~金沢中学校
 1870(明治3)~72(明治5)

◆変則学校~変則中学校・変則専門学校
 1873(明治6)~74(明治7).10

◆別伝習所
 1873(明治6)~74(明治7).8

**◆石川県集成学校
 ~石川県師範学校
 ~石川県男子師範学校・石川県女子師範学校**
 1874(明治7).10~77(明治10).2

**◆啓明学校~中学師範学校
 ~石川県専門学校
 ~第四高等中学校
 ~第四高等学校~金沢大学**
 1876(明治9)~1964(昭和39)
 当時、旧明倫堂・経武館
 現、中央公園

12 ◆壮猶館
 1854(安政元)~71(明治4)

◆英学所
 1869(明治2)
 当時、海防方火術所稽古場
 現、知事公舎

**13 ◆石川県第一師範学校・石川県第一女子師範学校
 …石川県師範学校
 ~石川県尋常師範学校**
 1877(明治10).2~89(明治21)

**◆第四高等中学校
 ~第四高等学校~金沢大学**
 1893(明治26)~1964(昭和39)
 当時、旧明倫堂・経武館
 現、中央公園・並木通り

14 ◆中学東校
 1870(明治3)~71(明治4)

◆英学義塾~英仏学校~英学校
 1872(明治5)~76(明治9)

◆変則専門学校
 1873(明治6)~74(明治7).8

◆石川県集成学校
 1874(明治7).8~10

**◆変則中学校・変則専門学校
 ~石川県中学校**
 1874(明治7).10~76(明治9)
 当時、巽御殿 現、成巽閣



参考文献:『石川県教育史』第1巻、『金沢大学50年史』通史編、金沢大学医学部十全同窓会「金沢市近代医学史跡図」
 赤祖父一知「加賀藩種痘所の変遷(一)「彦三種痘所」—その所在地を求めて—」,ほか

◆ 出品資料目録

I. 金沢大学の源流			
1	明倫堂扁額	1792	本館
2	経武館扁額	1792	本館
II. 金沢大学創基のころ～加賀藩種痘所の開設とその背景～			
① 加賀藩における洋学教育の伝統			
1	解体新書 5冊 杉田玄白ら	1774	金沢大学医学部記念館
2	解体新書KuKuRIデジタルコンテンツ		北陸先端科学技術大学院大学附属図書館本による
3	重訂解体新書 大槻玄沢重訂	1826	金沢市立玉川図書館近世史料館
4	芝蘭堂新元会図(通称オランダ正月) 複製	1902	金沢大学医学部記念館
5	増補重訂内科撰要 宇田川玄随訳 藤井方亭補	1793	金沢大学医学部記念館
6	和蘭字彙 桂川甫周編	1855	金沢大学医学部記念館
7	Handboek der physiologische Scheikunde Lehmann C.G.	1856	金沢大学附属自然科学系図書館
8	壮猶館御用隠密達留	1854	金沢市立玉川図書館近世史料館
9	成瀬正居日記	1843-1901	金沢大学附属中央図書館
10	English Grammar Quackenbos, G.P.	1867	金沢大学附属中央図書館
11	A Class-Book of Chemistry Youmans, Edward L.	1866	金沢大学附属中央図書館
② 種痘所の開設と黒川良安			
12	池田先生治痘口訣 齋藤順写本		金沢大学医学部記念館
13	種痘診断書 石川県種痘所	1874	石川県立歴史博物館
14	黒川良安の増補に関わる書状	1867	金沢大学医学部記念館
15	黒川自然翁肖像盾牌	1969	金沢大学医学部記念館
16	黒川良安由緒書	1870	金沢市立玉川図書館近世史料館
17	蓮湖魚毒説 黒川良安	1851	金沢市立玉川図書館近世史料館
18	鈔録合集 嘉永六年 自八月至十二月	1853	金沢市立玉川図書館近世史料館
19	加賀藩侍帳	1855	石川県立図書館
20	合信著「婦嬰新説」	1859	金沢大学附属中央図書館
21	弘化嘉永期「金府大絵図」		金沢市立玉川図書館近世史料館
III. 幕末・明治初期の金沢と学都への指向			
① 養生所から医学校へ			
22	加賀藩卯辰山養生所「病院任法書」	1867	金沢市立玉川図書館近世史料館
23	養生所設計図面	1867	金沢大学医学部記念館
24	病院丸散録(卯辰山病院日用方)		金沢大学医学部記念館
25	卯辰山開拓図絵 芳知画		石川県立図書館
26	辞令 医学館教師	1870	金沢大学医学部記念館
27	感謝状 スロイス雇継給料補助	1876	金沢大学医学部記念館
28	感謝状 ホルトルマン月給補助	1876	金沢大学医学部記念館
29	東遊日記 田中信吾	1880	金沢大学医学部記念館
30	辞令 医務取調トシテ上京	1879	金沢大学医学部記念館
31	辞令 金澤病院長兼医学校長	1880	金沢大学医学部記念館
32	金沢病院医員心得	1880	金沢大学医学部記念館
33	金沢医学校本科生規則	1880	金沢大学医学部記念館
34	金沢病院題字木製額		金沢大学医学部記念館
35	石川県金沢病院沿革 コピー		金沢大学医学部記念館
36	木村孝蔵肖像画 早田楽齋画	1897	金沢大学医学部記念館
37	第四高等学校医学得業士称号認許証	1896	金沢大学医学部記念館
② 藩校から官立高等学校・師範学校へ			
38	加賀金沢細見図	1876	金沢市立玉川図書館近世史料館
39	石川県専門学校生徒写真	1886	金沢ふるさと偉人館
40	石川県専門学校附属初等中等科卒業証書	1887	金沢大学医学部記念館
41	旧石川県専門学校敷地並資産引継書類及目録	1888	本館
42	Conic Sections and Analytical Geometry Robinson, Horatio N. (ロビンソン, 代数幾何)	1878	金沢大学附属中央図書館
43	A Treatise on Plane Coordinate Geometry Todhunter, Isaac (トドハンタル, 円錐曲線法)	1867	金沢大学附属中央図書館
44	Manual of Physiology Kirks, W.S. (キルク, 生理学)	1868	金沢大学附属中央図書館
45	First Book of Zoology Morse, Edward S. (モース, 動物学)	1877	金沢大学附属中央図書館
46	廓堂片影 北條時敬著, 西田幾多郎編	1931	本館
47	大日本教育会雑誌 40・41	1886	金沢大学附属中央図書館
IV. 明治初期、金沢における科学教育			
① 講義録			
48	スロイス講義録 動物学 下 稲坂謙吉筆記		金沢大学医学部記念館
49	スロイス講義録 究理学 第十一帖 稲坂謙吉筆記		金沢大学医学部記念館
50	ホルトルマン講義録 質治舎密 稲坂謙吉筆記	1875	金沢大学医学部記念館
51	スロイス講義録 動物学 藤本純吉筆記		金沢市立玉川図書館近世史料館
52	スロイス講義録 究理学 藤本純吉筆記		金沢市立玉川図書館近世史料館
53	スロイス講義録 植物学 藤本純吉筆記		金沢市立玉川図書館近世史料館
54	ホルトルマン講義録 実験化学 藤本純吉筆記		金沢市立玉川図書館近世史料館
55	ホルトルマン講義録 有機化学 藤本純吉筆記		金沢市立玉川図書館近世史料館
56	ホルトルマン講義録 局所解剖学 田中信吾筆記		金沢大学医学部記念館
57	中濱東一郎講義録 内科各論 第四号 飯盛益太郎筆記	1885	金沢大学医学部記念館
58	木村孝蔵講義録 外科通論 飯盛益太郎筆記	1885	金沢大学医学部記念館
② 教科書と掛図			
59	数学問題集 上下 関口開	1871	石川県立歴史博物館
60	増補新撰数学 関口開	1875	石川県立歴史博物館
61	改正新撰数学 上下巻 別冊 解答 関口開	1878	金沢大学附属中央図書館
62	スーヴ氏講義 官許動物学 大田美農里訳校	1874	金沢市立玉川図書館近世史料館
63	人体組織概論 3冊 田口和美	1879-1884	金沢大学附属自然科学系図書館
64	Physiologische Vortrage Tiegel, E. (チーゲル, 生理学)	1878-1879	金沢大学附属自然科学系図書館
65	詳約薬物学 乾坤 鈴木孝之助訳補	1881	金沢大学附属自然科学系図書館
66	レイノルズ社化学掛図 化学物理/有機元素	1867	金沢大学附属中央図書館
67	ホワイト氏動物図	1860頃	金沢大学附属中央図書館
68	The Instructive Picture Book, or a Few Attractive Lessons from the Natural History of Animals (ホワイト氏動物図の説明書)	1860頃	金沢大学附属中央図書館
69	人体生理図第七 五感器	1884	金沢大学附属中央図書館
70	金石一覽 第一	1881	金沢大学附属中央図書館
③ 実験機器			
71	物理学用天秤		本館
72	マグデハルグ半球		本館
73	サバート氏歯車		本館
74	クーニック氏音響波動器		本館
75	ブンゼン度光器		本館
76	顕微鏡		本館
77	長形磁鉄		本館
78	電信機模型		本館

◆協力者・協力機関(50音順、敬称略)

遍プロジェクト	金沢大学医学部記念館
赤祖父一知	金沢大学附属自然科学系図書館
石川県立図書館	金沢大学附属中央図書館
石川県立歴史博物館	金沢ふるさと偉人館
板垣英治	(株)COM-ONE
金沢市立玉川図書館近世史料館	北陸先端科学技術大学院大学附属図書館

◆資料館特別展企画ワーキンググループ

古畑徹(資料館長)、大久保英哲(人間社会研究域学校教育系)、山本健(医薬保健研究域医学系)、本康宏史(石川県立歴史博物館)、宮下和幸(金沢市立玉川図書館近世史料館)、堀井美里(資料館客員研究員)

◆執筆者(掲載順)

本文:古畑徹 コラム:山本博、宮下和幸、谷本宗生、板垣英治

◆主要参考文献

- ・石川県教育史編纂委員会『石川県教育史』第1巻、石川県教育委員会、1974
- ・石川県歴史博物館編『春季特別展「科学技術の19世紀」図録』、石川県歴史博物館、1993
- ・板垣英治編『加賀藩旧蔵洋書総合目録』、金沢大学資料館、2006
- ・金沢大学医学部百年史編集委員会編『金沢大学医学部百年史』、金沢大学医学部創立百年記念会、1972
- ・金沢大学資料館編『石川県専門学校洋書目録－明治日本の近代化に貢献した洋書』、金沢大学資料館、2004
- ・金沢大学資料館編『石川県専門学校物理機器図録:明治10年代の物理学教育と文部省交付物理機器』、金沢大学資料館、2005
- ・金沢大学50年史編纂委員会編集『金沢大学五十年史』部局編・通史編、金沢大学50周年記念事業後援会、1999・2001
- ・金沢大学附属図書館・金沢大学資料館編『蔵書展:金沢大学の源流:金沢大学創立50周年記念展示』、金沢大学創立50周年記念展示実行委員会、1999
- ・金沢大学附属図書館・金沢大学資料館『平成16年度金沢大学附属図書館・資料館特別展「文字・人・こころ:金沢大学ゆかりの墨跡・拓本・手跡」図録』、金沢大学附属図書館・金沢大学資料館、2004
- ・金沢大学附属図書館・金沢大学資料館『平成19年度金沢大学附属図書館・資料館特別展「教える×学ぶ:師範学校といしかわの教員養成史」図録』、金沢大学附属図書館・金沢大学資料館、2007
- ・高澤裕一ほか『石川県の歴史』、山川出版社、2000
- ・松田清・益満まを編『金沢大学所蔵近代教育掛図目録 印刷図編』、京都大学大学院人間・環境研究科、2008
- ・赤祖父一知・今井美和・堀井美里「田中信吾記『東遊日記』」、『北陸医史』30、2008
- ・赤祖父一知「加賀藩種痘所の変遷(一)「彦三種痘所」－その所在地を求めて－」、『北陸医史』33、2011
- ・板垣英治「加賀の西洋医学の系譜」、『北陸医史』31、2009
- ・板垣英治「石川県甲種医学校の医学教育:医学教科書と参考書から医学教育を見る」、『日本海域研究』40、2009
- ・板垣英治「明治初期の金沢での薬学教育」、『北陸医史』32、2010 ほか

◆表紙写真の説明

中央:『解体新書』図版の扉(中村学園大学図書館HPより転載) 左上より反時計回りに:金沢大学医学部記念館蔵『解体新書』、芝蘭堂新元会図[別名:オランダ正月](以上2点は『金沢大学50年史』通史編より転載)、黒川良安レリーフ(金沢大学医学類教育棟玄関。能登印刷撮影)、彦三種痘所跡地(現彦三郵便局。古畑撮影)、壮猶館跡(現石川県知事公舎。能登印刷撮影)、旧金沢医学館(旧津田玄蕃邸、現兼六園管理事務所分室。能登印刷撮影)、津田淳三肖像画、スロイス肖像写真、田中信吾肖像画(以上3点は金沢大学医学部記念館蔵、能登印刷撮影)、石川県金沢病院(1879年当時。『金沢大学50年史』通史編より転載)

金沢大学創基百五十年記念事業関連企画

金 大 事 始

Beginning of Kanazawa University

平成二十三年度
金沢大学資料館特別展

〈開催期間〉

2011年10月17日(月)～11月18日(金)

〈編集・発行〉

金沢大学資料館

〈発行日〉

平成23年10月17日

〈印刷〉

能登印刷株式会社
